

# 『おもろさうし』にみるオボツ神女集団：「さしふ」・「成り子」を中心に

著者	小山 和行
雑誌名	沖縄文化研究
巻	19
ページ	313-355
発行年	1992-09-18
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00015732">http://hdl.handle.net/10114/00015732</a>

# 『おもろさうし』にみるオボツ神女集団

——「さしふ」・「成り子」を中心に——

小山 和 行

はじめに

琉球国首里王府編纂の儀礼歌謡集『おもろさうし』（全二十二巻、一五三一年～一六二三年編纂。但し一部不明。）には相当数にのぼる、いわゆる「神女オモロ」が収められている。これら神女オモロのうち、巻一、三、四、六、七、十二はその多くが、最高位の神女である聞得大君きこみをはじめとして、王族神女である、差笠さしかさ、煽りあおりやへ、首里大君、精ん君、君加那志、おわもり、といった、終身職たる、いわゆる高級神女に関するものである。

高級神女たちは、王府儀礼において、天上他界Ⅱオボツ・カグラから国王のためにセヂ（Ⅱ靈力。靈力を意味する語には、『おもろさうし』中、セヂ、スへ、ゲオに三大別されるものがある。）をもたらしながら、祭祀祭礼の場には神として出現する。

ところで、高級神女に関するオモロは、他のオモロ群同様、一部を除いて詞書がないものが大半であるために、具体的な祭式的背景や、祭祀祭礼の個性を特定しにくいものが多いのが実情である。よって祭祀の性格をみようとすればいきおい詞書きの記されているオモロが手がかりということになる。具体的には、国王の即位を慶賀することを主題とするといわれる祭祀「君手摩りの百果報事」において謡われたオモロが詞書きのあるものを中心に十六首収められているが、まずはこのオモロ群の分析を通して、国王と、聞得大君をはじめとする高級神女の関係が論じられてきた<sup>(2)</sup>、さらにはまた、より徹底した分析作業が必要とされているといつてよいであろう。

近年、神女オモロの分析を通して、そのモチーフ及びテーマの周到な分析が作業として着実に進んでいる<sup>(3)</sup>。これらは、南島歌謡全体を視野に入れ、かつ豊富なフィールド・ワークの蓄積の上に立つての基礎的な分析作業であるが故に、オモロの解説に際しても大きく貢献するものといえると思う。本稿でもその成果はできるだけ援用してみたいと考えている。

前述した、「君手摩りの百果報事」の際に謡われたオモロは、中心的神女の名も、慶賀される国王の名も、さらに年代も特定しうる。もちろん、祭式の細目のわたって詳細に知りうることはオモロの、

モチーフを主に謡い込む性格からは難しい。例えば、国王に付与されると考えられる神号などは謡われていないし、またそれが主要な目的であつたとも考えにくい。にもかかわらず、他の神女オモロと同じように、高級神女たちは、天上他界から出現（Ⅱ「降りる」）し、靈力を国王にもたらし、自ら国王を靈的に守護することを宣言しつつ、国王の宗教的ひいては、政治的力の強化に奉仕している。そうであるが故に、祭式の具体性が明示されているオモロの分析は神女オモロ解読の有効な手段と思われる。神女たちが、神として出現することがどのように表現され、それがどのような意志に基づくものなのか（指し図している神格は何者か）、またいかなるものを国王に捧げる（Ⅱ「みおやす」）ことによってその靈的守護を果たしうると信ぜられているのか、これらは神女オモロの内包するモチーフやテーマの具体相の分析を必然的に強いるものとなる。

また、神女たちがよって来たる天上他界Ⅱオボツ・カグラは神女オモロの中では頻出している。それは、王府のイデオロギー強化の過程で、海上他界Ⅱニルヤ・カナヤを克服する形で、いわゆる垂直軸（Ⅱ「天の思想」の受容等の理由もあげられる。）の他界が創出されたものと考えられてきたのだが、本稿では、さらに聞得大君をはじめとする高級神女たちの〈担い手〉としての役割に注目してみたいと思う。結論を先取りするならば、高級神女たちは天上他界Ⅱオボツ・カグラと交通するのみで、いわゆる海上他界Ⅱニルヤ・カナヤとの交渉をもつ、聞得大君を頂点とする行政神女組織とは区別される。あえて言うならば〈オボツ・カグラ神女集団〉を構成するものと思われる。問題はその構成の

有様が、最高神女である聞得大君を中心として、どのような表現としてたち現れているのか、またいかなる神女が国王の霊的守護のために降臨し、それを約束するのか、祭式の主題が明らかな「君手摩りの百果報事」のオモロを中心に表現類型の分析の中から明らかにしてみたい。

#### 一、「君手摩りの百果報事」のオモロ

国王の即位（あるいは在位の正統性）を慶賀するために神々が出現しオモロを託宣する祭式といわれる「君手摩りの百果報事」のオモロは、『おもしろさうし』巻十二「いろ／＼のあすびおもしろ御さうし」の後半に集中して収められている。それら、詞書きからも、また位置関係からも特定されているオモロの中で、年代が最も早い（一五四五年）次のオモロを引用し、表現の特徴を考えてみたい。

#### 尚清王御代<sup>(4)</sup>

嘉靖廿四年乙巳<sup>(5)</sup>の年きみてすりもか、ほうことの時に八月十九日つちのとの酉日のとらの時に  
きこゑ大きみの御まへより給申候

12—694

おしかけかふし

一きこゑ大きみや、

すへ、ゑらひやり、おれわちへ、

あんしおそいしゆ、

きみきや、せち、もちよわれ

又とよむせたかこか、

ませねかて、おれわちへ

又いけな、きみ、そろへて

なりきよ、かみ、あとへて

又とし八とせ、なるきやめ

おほつたけ、おきやつめ

又ゑか八とせ、なるきやめ、

かくらたけ、おき（やつめ）、

又あんしおそいか、おこと、

きみてつり、まとさ

又わうにせか、おこと、

みもの、あすひ、まとさ

又大ころた、そろへて、

もりやへこた、あとへて

又きみ、いきよい、このめ

ぬしつかい、このめ

又つかい、てゝ、よしられ、

おこと、てゝ、よしられ

又あかくちやか、よいつき、

おほつたけ、とよて

又あんしおそいか、おこと

大きみに、しなて

(―線印、引用者)

尚清王御代

嘉靖廿四年己巳のとしきみてつりのもゝほうことの時に八月廿五日きのとのうのへうまのときに  
きこゑ大きみの御まへよりたまわり申候

12  
―  
695

かくらとよてかふし

一きこゑ大きみや、

とよむ、せたかこか、

さしふ、おれなおちへ

又おほつゑか、とりよわちへ、

たしま、きらなおちへ

又かくらゑか、とりよわちへ

たきより、きらなおちへ

又あんしおそいか、おこと、

わうにせか、おこと

又大きみは、のたて、

きみくは、のたて、

又あまこあわちへ、おかま、

みかおう、あわちへ、てつら

又あかくちやか、よいつき、

せらちへんに、とよて

又けらへ、おほころた、



あんしおそいに、よしられ

又きみくも、ほこて、

ぬしくも、ほこて

(―線部 引用者)

右に引用した、連続する二首のオモロは嘉靖二十四年(一五四五年)、第二尚氏第四代国王(在位一五二七年―一五五五年)尚清の王位の正統性を慶賀する祭祀「君手摩りの百果報事」が挙行された際に、最高神女である聞得大君から託宣という形で賜ったオモロである。一五二七年に即位した尚清王の「即位を慶賀」するオモロと解することが難しいことは容易に理解できる。あくまでも神女の側に祭祀挙行の理由があると考えるのが妥当であるといえよう。この点に関しては既に一つの仮説が提出されている。<sup>(6)</sup>

最高位の神女である聞得大君の初代は文献からは尚真王(在位一四七七年―一五二六年)の妹である音智殿茂金おしらとのもえかね(号は月清つききよら)とされている。生没不詳であるために次代の第二代聞得大君の任職の時期も推測の域を出るものではないが、尚清王代の第一回目の「君手摩りの百果報事」祭祀の挙行が、現国王即位後十八年を経過した後であることを考えれば、初代と第二代の間における継承の問題がまず第一に理由と考えられるのが妥当であろう。つまり、尚清王を慶賀する一五四五年の百果報事は、

第二代聞得大君「峯間のきこゑ大君がなし」(童名は真加戸樽、号は梅南。)<sup>まかとたる</sup>が任職した直後であった可能性は大である。<sup>(7)</sup>また、「君手摩りの百果報事」は詞書の上からは、第二尚氏第七代国王である尚寧王代までであり、一般には以後は挙行されなかったものと理解されている。尚寧王代までの、聞得大君の継承順を示すと次のようになる。

〈歴代聞得大君一覽〉<sup>(8)</sup>

	神女(号)	生没年	国王名(在位)	「君手摩り」神女名(年代)
①	尚円王女(月清)	???	尚真(一四七―一五六)	(一五五年)聞得大君 (一五九年)聞得大君 君加那志
②	浦添王子朝満女(梅南)	?―一五七・九・二七	尚元(一五六―一五七) 尚永(一五七―一五八)	(一五八年)聞得大君・差笠 首里大君 煽りやへ
③	尚元王妃(梅岳)	?―一六〇・五・一二〇	尚寧(一五九―一六〇)	(一五七年)精ん君
④	尚永王次女(月嶺)	一五四・九・七 ～ 一六三・三・二七	尚豊(一六二―一六四) 〈以下略〉	(一六〇七年)聞得大君 煽りやへ 差笠 首里大君 精ん君

〔 〕は新任の神女

表から読み取れることは、初代聞得大君から第二代聞得大君への継承年代は決め手に欠けるが、第二代聞得大君（Ⅱ嶺間の聞得大君加那志）から第三代聞得大君（Ⅱ真和志の聞得大君加那志）への継承年代のしほり込みがまずヒントになる。第二代聞得大君の梅南は生年は不明であるが、およそ一五一二年から一五一九年と考えられる。<sup>(9)</sup> また没年は一五七七年九月二十七日と特定されている。梅南は、尚真王の世子（後に廃嫡）であった浦添王子朝満の長女であり、初代聞得大君が第二尚氏の開祖尚円の子女であったことを考えれば、国王（あるいはその世子）の子女が聞得大君の選定されうるという継承原理の存在の十分な可能性からも有資格者といえよう。重要な点は、尚永王代の一五七八年十月十五日に挙行された「君手摩りの百果報事」が、第二代聞得大君没後満一年を経過している事実である。聞得大君職継承にあたっては、全く空位期間を設けずに継承するのか、あるいは一定期間（満一年あるいは「親喪三年」にならって満二年と一日）を置くのかは明らかではないが、服喪期間一年を想定すれば任職の問題も年代的にもふさわしい。

また同様に、第三代聞得大君である梅岳（尚元王妃）の没年一六〇五年（月日は不明）から、尚寧王代一六〇七年の「君手摩りの百果報事」（十月十日）は服喪期間（一年間と考えてみると）においても問題はないし、形式的には、一六〇七年の聞得大君の託宣のオモロを、任職直後における、国王のオナリ神としての聞得大君から与えられたものと位置づけうるとの見通しを有するであろう。

この見通しの上に立って、実際に「君手摩りの百果報事」のオモロの表現から、任職直後の聞得大

君（または他的高级神女を含めて）による国王守護の祭祀「君手摩り」を示唆する類型表現を抽出することが可能ではないかと思われるのである。引用した、卷十二―六九四、および六九五と連続する二つのオモロからは、次のような表現が類型を示すものとしてまず考えられるだろう。

〈連続部〉

①  
すへ ゑらびやり おれわちへ  
ませ ねがて おれわちへ

②  
きみてづり まとさ  
みものあすび まとさ

③ さしふ おれなおちへ

〈反復句〉―セジ（靈力）の授受

④ あんじおそいしゆ

きみぎやせぢ もちよわれ

①の対句において、聞得大君が神として出現（「降れわちへ」）する様子、状態が謡われている。「すへ」は「精」とも「末」とも表記が可能だと思われる。「精」であれば靈力を意味し、聞得大君が自ら継承すべき「聞得大君セヂ」と解される。また、「末」であれば末裔を意味し、正しい後継者をシジ神が選定してと解される。この場合は両義について理解が可能であり、両者を内包する意味を有していると考えた方がよいであろう。新たな後継者としての聞得大君の存在を確認しているような対句表現と理解してみたい。また、③の反復句「さしふ 降れ直ちへ」は、同一表現あるいは同類表現が他の「君手摩り」関係のオモロにも頻出する常套句であり、新神出現を謡い込んだものと解してみたい。「さしふ」は「神が依り憑く神女」を意味し、「もつき」と対語関係を構成する。オモロの他の表現では「てるかはがうざし（「てるしのがうざし」とあり、「さし」には「指示、命令」の意も込められている。「てるかはがうざし」も「日神の御命令」と解され、神の意志の発現を示す句である。ここでは更に一步踏み込んで「神に選ばれた者」||「セヂを継承する者」を意味するものと考えてみたい。

ところで、類型表現の中で注意されるのはやはり「降れる（降りる）」という、出現を指示する語であろう。最高位の神女聞得大君と他の高級神女との違いもこの語をめぐって明らかに表れていると思われる。前述したように、一五四五年の「君手摩りの百果報事」は、詞書きの上から、また同類の

オモロを一括して並べた卷十二の編纂の意図からも託宣する神女は聞得大君一人のみであり、対国王との一対の関係が際立った神事といえる。このことは、さらに四年後に、やはり尚清王代に挙行された「君手摩りの百果報事」において謡われた、七三二番〜七三四番のオモロについてもいえるだろう。七三二番のオモロでは聞得大君が登場するのであるが、つづく七三三番、七三四番は君加那志きみがなしのオモロであり、一五四九年の「君手摩りの百果報事」は君加那志を中心とした祭祀という予見が成り立つ。<sup>(10)</sup>ここでもやはり、「降れる」を中心に類型表現が注目されてくるが、さらにこの表現が、聞得大君と他の高級神女（君加那志、差笠、煽りやへ、首里大君、精ん君）達との地位、神格上関係の差として現われているのではないかと思われる。君加那志から給わったとされるオモロを次に引用する。

12  
—  
733

尚清王御代

嘉靖廿八年巳酉のとしきみてつりのも、かほうことの時に十月十三日つちのとのとりへのうまの時にきみかなしのみ御まへより給申候

「あふりやへかふし」

一きこゑきみかなし、

さしふ、おれかわて、

しよりもり、おれわちへ、

なさいきよもいしよ、

きみふさて、ちよわれ

又とよむきみかなし、

むつきおれなおちへ、

またまもりおれわちへ、

又なさいきよもい、おちおそい、

み、まふてす、おれたれ

又あか、かいなて、あちおそい、

かいなて、す、おれたれ

※  
又てるかはは、のたて、

すへとめて、おれわちへ

※  
又てるしのは、のたて、

ませとめて、おれわちへ

又なさいきよもい、あちおそい、

しよりもりちよわちへ、

大きみに、しなわ

(―線部、※印、引用者)

12  
―  
734

きみかなしふし

―きこゑきみかなし、

いけな、なりかわて、

しより(もり)、おれわちへ、

なさいきよもいに、

しまか、いのち、みおやせ

又とよむきみかなし

なりきよ、おれかわちへ、

又さしふ五ころに、

すへとめて、おれわちへ

又むつき五ころに、

みまふてす、おれたれ



又なさいきよもい、あちおそい、

およりとて、おれわちへ

又あか、かいなて、あちおそい、

みまふてす、おれたれ

又<sup>※</sup>てるかはか うさししゆ、

此さらに、おれわちへ

(―線部、※印、引用者)

引用の二つのオモロからは次の類型表現が注目されよう。

〈連続部〉

① さしふ おれかわて

むつき おれなおちへ

② すへとめて おれわちへ

ませとめて おれわちへ

③ いけな なりかわて  
なりきよ おれかわちへ

④ さしふ五ころに すへとめて おれわちへ  
むつき五ころに みまふてす おれたれ

連続する二つのオモロでも頻出する、「おれかわて」、「おれわちへ」、「おれなおちへ」、「おれたれ」の主体は全て神女である君加那志である。国王を守護（「みまふて」、「かいなて、」）するために首里杜Ⅱ真玉杜に神降りし、対象の国王に「島が命」を「奉る」（Ⅱ「みおやせ」）ことが明示されている。先に引用した、聞得大君託宣のオモロでも「按司襲いしゆ 君がせぢ 持ちよわれ」とあって、セヂ（Ⅱ靈力）の授受がはつきりと謡い込まれている。また、類型表現「さしふ 降れ変わて」（Ⅱ「むつき 降れ直ちへ」）も、六九五番の聞得大君のオモロでは「さしふ 降れ直ちへ」と表現されている。「降りる」主体は、それぞれ、「さしふ」としての、聞得大君、君加那志を指示していると考えられる。同様に、「すへⅡ精（または末） 尋めて 降れわちへ」（Ⅱ「真精（または真末） 尋めて 降れわちへ」）も、六九四番のオモロに表現される、「精（または末） 選びやり 降れわちへ」（Ⅱ「真精（または真末） 願て 降れわちへ」）と全く同義的な句として理解できよう。

だが、問題は「いけな 成り変わて」（Ⅱ「成り子 降れ変わちへ」と謡われている「いけな」Ⅱ「成り子」である。「さしふ」（Ⅱ「むつき」）は、既に述べたように六九五番のオモロにも、七三三番、七三四番のオモロにも登場していた。しかし、六九四番の第三節に「いけな君 揃へて 成り子神 集へて」と謡われる対句部分の主体は聞得大君であり、「いけな君」Ⅱ「成り子神」と一括される高級神女の「群れ」を聞得大君が統轄している様子がうかがい知れる。「さしふ」（Ⅱ「むつき」）も（「いけな」Ⅱ）「成り子」も「神が依り憑き神に成り変った神女<sup>(11)</sup>」として従来は、意味的には同義的に解されてきた。だが引用の聞得大君および君加那志のオモロを比較してみるかぎり、両者には神格差異があるのではないかと思われる。ここで「降れる」に再び注目しつつ、「さしふ」と「成り子」の神格の差の有無いかんを検討するために万暦十五年（一五八七年）の「精ん君<sup>せ</sup>」から託宣されたオモロをとり上げる。詞書きにみるかぎり「精ん君<sup>せ</sup>」唯一人が「君手摩りの百果報事」に登場している。このことが表現の特色をみる上で有効であると思われるからである。

## 二、「さしふ」と「成り子<sup>きよ</sup>」

12  
—  
739

尚永王御代

萬暦十五年丁亥のとしきみてつりのも、かほうことの時に十月十八日みつのとのとりのへのさる

か時せんきみのみ御まへより給申候

一きこゑせんきみや、

なりきよ、おれふさて、

なさいきよもい、わうにせ、

せちまさて ちよわれ

又とよむきみ、とよみか、

いけな、おれなおちへ

又みものうちの、まみやに、

あすて、なおちへ、からは

又かわるめの、まみやに、

ほこて、なおちへ、からは

又さしふ五ころに、

おれなおちへからは

又むつき七ころに、

みまふてす、おれたれ

又しよりもり、ちよわる、

あか、なさいきよ、わうにせ  
すへなく、

せちまさて、ちよわれ

又またまもり、ちよわる、

あか、なさいきよ、わうにせ、  
すへなく、せちまさて、ちよわれ

(―線部、引用者)

右のオモロにおいても、類型表現「成り子、降れ相応て」(Ⅱ「いけな、降れ直ちへ」、および「さしふ五ころに 降れ直ちへからは、むつき七ころに、見守てす、降れたれ」が、「降れる」を中に謡い込まれている。注意したいのは、「降りる」に付随する動作や状態表現である。万暦六年(一五七八年)に挙行された「君手摩りの百果報事」における煽りやへの託宣のオモロには、その状態表現の明確な類型をみることができる。

一きこゑあおりやへや、

せちまさて おれわちへ、

世もつせぢ、

あぢおそいに みおやせ

又とよむくにもりや、

けお そわて おれわちへ

〈以下略〉

右の例は、既に言及されているように<sup>(12)</sup>、「せぢ まさて（靈力がまさって）」、「げお そわて（靈力が襲って）」は、神女「煽りやへ」が降るときに靈力がゆたかについている状態であることが明示されている。同様の表現は例えば次のようなオモロにも謡われている。

3  
113

おしかけふし

一きこゑ大きみぎや、

せぢまさて、おれわちへ

あちおそいしよ、

きみぎや、せぢもちよわれ

又とよむせたかこか、

けおそわておれわちへ

又とし、なおさ、とりわちへ、

おほつ、せぢ、いきやよわちへ

又きら、なおさ、とり、よわちへ

かくら、せぢ、おろちへ

又きみてづり、まとさ

みもんあすび、めつらしや

又ゑそにやすへ、あちおそい、

いみやからだ、

せぢ、まさてちよわれ

(―線部、引用者)

引用のオモロでも、聞得大君が「せぢまさて（霊力が勝って）」、「げおそわて（氣＝霊力が襲って

《憑いて》と、靈力を憑けることによって豊かな靈力を天上から下ろしつつ、神として「君手摩り」（Ⅱ「見物遊び」）と謡われる祭祀の場に出現することがみてとれる。このオモロは「君手摩りの百果報事」を特定するような詞書きはないのだが、謡われている内容からは同類のオモロであるという想像をたくましくさせる。高級神女たちが登場し、かれらが靈力を豊かに持ちながら神として祭祀に臨み、国王に対して靈力を授けることを謡い上げるオモロの中には、この3-113のオモロに象徴されるように詞書きをもたないものであっても「君手摩りの百果報事」に際して、聞得大君をはじめとする特定の高級神女からの託宣オモロという性格をもつものが相当程度存在するにちがいない。だが本稿ではこの枠組設定が主要な論点ではないので、この課題追究に関してはまた稿を改めてということにしたい。

ただし、3-113のオモロの第一節および第二節の連続部にみられる対句は、先にも言及した、「君手摩りの百果報事」のオモロ12-694の第一節と第二節の、やはり連続部における対句部分「すへ、ゑらびやり、おれわちへ」（Ⅱ「ませ ねがて おれわちへ」とは、表現の類型性という点からほぼ同義的内容として比定しうるものと思われる。このことから、「君手摩りの百果報事」の詞書きをもつオモロ、さらに詞書きがなくとも前後からそれと判断できる、計十六首のオモロから、表現にちがいが見られるものの、ほぼ同義的という点で類型表現と考えられるもの（主として対句部分）を挙げることができる。



(12  
―  
694)

聞得大君ぎや すへ 選えらびやり 降おれわちへ

鳴響む精高子が ませ 願ねがて 降おれわちへ

(12  
―  
695)

聞得大君ぎや 鳴響む精高子が さしふ 降おれ直なおちへ

(12  
―  
732)

聞得大君ぎや おぼつせぢ 降おろちへ

鳴響む精高子が かぐらせぢ 降おろちへ

(12  
―  
733)

聞ゑ君加那志 さしふ 降おれ変かわて

鳴響む君加那志 むつき 降おれ直なおちへ

(12  
―  
734)

聞ゑ君加那志 いけな 成なり変かわて 首里杜 降おれわちへ

鳴響む君加那志 成なり子 降おれ変かわちへ 真玉杜 降おれわちへ

(12  
— 736)

聞ゑ煽りやへや  
鳴響む国守りや  
せぢ 勝て 降れわちへ  
けお そ 襲わて 降れわちへ

(12  
— 737)

聞ゑ差笠が すへ 尋めて 降れわちへ  
鳴響む大君ぎや ませ 願て 降れわちへ  
と ねが お

(12  
— 738)

首里大君ぎや さしふ 選で 降れわちへ  
鳴響む国襲いぎや さしふ 降れ直ちへ  
あら お

(12  
— 739)

聞ゑ精ん君ぎや 成り子 降れ相應て  
鳴響む君鳴響みが いけな 降れ直ちへ  
な きよ お お  
お なお

さしふ 五ころに 降れ直ちへからは  
むつき 七ころに 見守てす 降れたれ  
みまお お

(12  
—  
740)

聞得大君ぎや さしふ 降<sup>お</sup>れ直<sup>なお</sup>ちへ  
鳴響む精高子が むつき 降<sup>お</sup>れ相<sup>あ</sup>応<sup>お</sup>て

(第3節)

いけな君<sup>きみ</sup> 集<sup>あ</sup>へて  
成<sup>な</sup>り子<sup>きよ</sup> 揃<sup>そろ</sup>へて

(12  
—  
741)

〔「降れる」表現はない〕

(12  
—  
742)

聞ゑ煽<sup>き</sup>りやへや 君<sup>きみ</sup>ぎやすへ 降<sup>お</sup>れわちへ  
鳴響む国守りや ませ 願<sup>ね</sup>て 降<sup>お</sup>れわちへ

(12  
—  
743)

聞ゑ差笠が さしふ 降<sup>お</sup>れ変<sup>か</sup>わて  
鳴響む差笠が むつき 降<sup>お</sup>れ直<sup>なお</sup>ちへ

(12  
—  
744)

首里大君ぎや 首里杜 降<sup>お</sup>れわちへ  
鳴響む国襲<sup>お</sup>いぎや 真玉杜 降<sup>お</sup>れわちへ

聞え精ん君ぎや すへ 尋<sup>と</sup>まいて 降<sup>お</sup>「れ」わちへ  
 鳴響む君鳴響みぎや ませ 願<sup>ねが</sup>て 降<sup>お</sup>れわちへ

さしふ 五ころに 見<sup>みまふ</sup>守てす 降<sup>お</sup>れたれ  
 むつき 七ころに 搔<sup>か</sup>い撫<sup>な</sup>で、す 降<sup>お</sup>れたれ

(―線部、引用者。ルビは必要部分のみに限定。)

引用例からもみてとることができるように、聞得大君とそれ以外の高級神女たちの双方に関わって「さしふ」(＝「むつき」)が謡い込まれている。12-695、12-733、12-738、12-740にみられる用例は、いずれも降りる主体と「さしふ」(＝「むつき」)が一致していることを示していると思われる。「さしふ 降れ直ちへ」は「さしふ 降れ直りて」であり、「直る」は「正しくなる、元にもどる。」と解しうるから、「さしふ」(神の依憑する神女。『おもろさうし辞典』)として正しく降りてと理解できよう。また、12-740にみられる「さしふ 降れ直ちへ むつき 降れ相応て」は「さしふ」(＝「むつき」)にふさわしく降りている状態を意味していよう。よって「さしふ 降れ直ちへ むつき 降れ相応て」は「神の依り憑いた神女として(＝神として)正しく、ふさわしく降りて」と解釈すべき

ものと思われる。

ここで、先に引用した12-739のオモロの第五、六節の表現があらためて注目されることになる。「さしふ五ころに、降れ直ちへからは、むつき七ころに 見守てす 降れたれ」と謡われる対句部のうち、「五ころに」、「七ころに」の「に格」をどう解釈するかによって意味は大きく変わってくる。「動作の対象」を表わすと考えれば精ん君とは別の神女を想定しなければならなくなる。だが「状態あるいは資格を表わす」（「…として、…の様子で」）「に格」を考えれば主体としての精ん君に変わりはない。むろん後者と理解した方が自然であるし、前述した「て」の意味とも十分に対応することになる。引用の対句表現の中の「見守てす」も同様に守護の対象は神女とは理解できない。この問題は、さらに12-745のオモロにおいてもいえる。「さしふ 五ころに 見守てす 降れたれ むつき 七ころに 搔い撫で、す 降れたれ」は「降りる」主体としての精ん君が、「神の依憑した」神女として（即ち、神として）、「五ころ（＝七ころ）」と呼ばれる、高位レベル（＝高級神女レベル）の神女として降りることを謡い込んでいるものと理解すべきものと思われる。「見守てす」、「搔い撫で、す」と謡われる対象はあくまでも国王であると理解できる。このことは12-739のオモロにおいて、「見守て」の対象が誰であるのかを次の節で明確に謡い込んでいることから明らかにしよう。国王を守護し、いつくしむために神女は神として祭祀の場に登場するのである。よって「さしふ」（＝「むつき」）として精ん君は「国王を守護するために降りたのである」と当該箇所は解釈できよう。

ところで、この「さしふ」（＝「むつき」）に対して「成り子」（＝「いけな」）の、オモロの中での位置（＝神女の神格の差異を示すものとして）が気になる点である。12-740でも「いけな君 集へて成り子 揃へて」と謡われる主体は最高神女聞得大君であり、集められ、揃えられる神女達も高級神女を意味する「君」たちである。さらに12-734のオモロでは「聞え君加那志 いけな 成り変わて」、「鳴響む君加那志 成り子 降れ変わちへ」と謡われ、君加那志が「成り子」（＝「いけな」）として登場している。ちなみに、聞得大君自身については「成り子」（＝「いけな」）として表現される例は見当たらない。このことから、「さしふ」（＝「むつき」）と「成り子」（＝「いけな」）との間には、神女が神として出現するに際し、崇められる神格の差（聞得大君と他の高級神女の間における差異）が存在するのではないかという予見が成り立つのである。

これまでみたように、さしふ（＝「むつき」）には聞得大君以下、全ての高級神女が含まれている。これに対して「成り子」（＝「いけな」）には明らかに「さしふ」との差異がみられるのである。これまでは「君手摩りの百果報事」のオモロ詞句に限定して考えてみたが『おもろさうし』全巻に用例を広げて検討してみよう。（連続部の該当部分のみ示す。）

(A) 「さしふ」の例（ルビおよびふし名は省略する。）

(1) 聞得大君が「さしふ」として降りる

1  
16

一聞得大君ぎや 首里杜 降れわちへ

又鳴響む精高子が 真玉杜 降れわちへ

又さしふ 照る雲に 降れ直ちへからは

又さしふ 照るきしやけ 降れ相応てからは

3  
94

一聞得大君ぎや 鳴響む精高子が

又さしふ 降れ相応て むつき 降れ直ちへ

3  
107

一聞得大君ぎや あまみや吉日 取りよわちへ

又鳴響む精高子が しねりや吉日 取りよわちへ

又さしふ 五ころに 願いわちへ 依り降れて

又さしふ 七ころに このみよわちへ 憑き降れて

〈中略〉（二部混入あり。）

又大君よ 拝ま 君々よ 手摩ら

又おぼつ嶽 動かちへ 君々ぎや 誇て

7  
—  
367

一聞得大君ぎや いべの祈り し「よ」わちへ  
鳴響む精高子が 司祈り しよわちへ

〈中略〉

又さしふ 照る真物 搔い撫で、す 降れたれ

むつき 照るきしやき 搔い撫で、す 降れたれ

(2) 差笠が「さしふ」として降りる

4 — 204 (重複 12 — 743 前出。)

(3) 精ん君が「さしふ」として降りる

4 — 210 (重複、4 — 296、12 — 739、20 — 1379 前出。)

4 — 211 (重複、4 — 296、12 — 745、20 — 1380 前出。)

(4) 君加那志が「さしふ」として降りる

6 — 312

一聞ゑ君加那志 てるかはは崇べて

又鳴響む君加那志 (以下 なし)

〈中略〉



又さしふ 五<sup>いづ</sup>ころに 降れ直ちへからは

さしふ 七<sup>なな</sup>ころに 降れ直ちへからは

6 | 334 (重複 12 | 734 前出。)

12 | 733 (前出。)

(5) 首里大君が「さしふ」として降りる

4 | 208 (重複 6 | 294、20 | 137)

一首里大君ぎや 首里杜 降れわちへ

又鳴響む君鳴響みぎや ませ 願て 降れわちへ

〈中略〉

又さしふ 五ころに 見守てす 降れたれ

又むつき 七ころに 搔い撫でゝす 降れたれ

12 | 724

一首里大君が さしふ 選で 降れわちへ

又鳴響む国襲いが すへ 尋めて 降れわちへ

又かぐらぎやめ 鳴響で さしふ 選で 降れわちへ

又おぼつぎやめ 鳴響で ませ 尋(めて) 降れわちへ

又聞得大君と 十声 遣り交わちへ

又鳴響む精高子と ゑりちよ 遣り交わちへ

又吾が成さへ子 見守てす 降れたれ

(6) 押掛<sup>おしか</sup>けが「さしふ」として降りる

12 | 667 (重複 5 | 270)

一聞ゑ押掛けが 首里杜 降れわちへ

又君のにせ殿が 真玉杜 降れわちへ

又さしふ五ころに 降れ直ちへからわ

又さしふ七ころに 降れ相応てからわ

(傍線部、引用者)

引用例の中では、3 | 107 のオモロにみられる「さしふ五ころに 願いわちへ 依り降れて」、「さしふ七ころに このみよわちへ 憑き降れて」の対句部分について、「依り降れて」、「憑き降れて」の主体は、「君々よ 手摩ら」、「君々ぎや 誇て」と謡われる、聞得大君以外の神女と理解できよう。「吉日取り」するのは別格の最高神女である聞得大君であり、君々はあくまでも聞得大君に「願いわちへ (|| 「このみよわちへ」) (祈願なさつて)、その指し図のもとに神降りするという、いわば神格

の差異がみてとれるだろう。「さしふ五ころ（＝「さしふ七ころ」）として降りるのは「君々」であると考えられる。

(B)「成り子」(＝「いけな」)の例(ふし名は省略する。)

1  
1  
41

一あがる降り笠が 大君に知られて

いけな 選らで 降ろちゑ

(以下 混入部分があり、連続部不明。)

3  
1  
88

一聞得大君ぎや おぼつ吉日 取りよわす 首里杜 降れわちへ

又鳴響む精高子が かぐら吉日 取りよわす 真玉杜 降れわちへ

〈中略〉

又年 三年 いくます 十声 間近さ

いけな君 降ろちゑ

又吉日四年 させわす 御事 真早さ

成り子神 降ろちゑ

3 | 109 (重複 7 | 387)

一聞得大君ぎや きら直ちへ いけな君 依り降るちへ

又鳴響む 精高子が吉日直ちへ 成り子君 憑き降るちへ

3 | 112 (重複 22 | 1521)

一聞得大君ぎや おぼつ吉日 取りよわちへ

けおの内は 押し開けて

又鳴響む精高子が かぐら吉日 取りよわちへ

もちろ内は つき開けて

〈中略〉

又いけな君 先立て 首里杜 降れわちへ

又成り子君 いぐまちへ 真玉杜 降れわちへ

3 | 152 (重複 3 | 169)

一聞ゑ煽りやへや いけな成り変わて

首里杜 降れわちへ

又鳴響む煽りやへや 成り子 降れ変わて  
真玉杜 降れわちへ

6  
333

一聞多君加那志 首里杜 降れわちへ  
又鳴響む君加那志 真玉杜 降れわちへ  
又いけな君 先き立て 成り子神 いぐまちへ  
又てるかはす 世の結び 憑き降らせ  
又てるしのす 君が釘 差しよわれ

6  
334 (重複 12 | 734)

一聞多君加那志 いけな 成り変わて  
首里杜 降れわちへ  
又鳴響む君加那志 成り子 降れ変わて  
真玉杜 降れわちへ

7  
|  
360

一聞得大君きこあぎや けよの内は 押し開おあけて

首里杜しよりもり 降おれわちへ

又鳴響とよむ精高せだかこ子が もちろ内うちは つき開あけて

真玉杜まだまもり 降おれわちへ

又成なさい子思きよもい按司あち襲おそい いけな君きみ いきよわ

又吾あが搔かい撫なで按司あんじ襲おそい 成なり子君きよきみ いきよわ

12  
|  
727

一聞得大君きこあぎや 御島みしまい祈いのり 降おれわちへ

又鳴響とよむ精高せだかこ子か 御国みくに (以下なし)

〈中略〉

又いけな君きみ 立たて、 成なり子きよ端はな 立たて、

(―線部 引用者)

引用例のうち、1―41のオモロにおいては神女降り笠おかさが聞得大君に申し上げて、「いけな」を選んで降ろして、と謡われる。ここでは降り笠と「いけな」の関係がわかりにくい。降り笠を「いけな」と同一視してよいのか、あるいはより一段上の別の神格と考えた方がよいのかは、混入部分が後につづくこともあつて決めがたいが、いずれにしろ聞得大君の際立つた別格性は明らかにみてとれよう。この関係は3―88の、「いけな君 降ろちゑ」、「成り子神 降ろちゑ」、さらに3―109の「いけな君 依り降るちへ」、「成り子君 憑き降るちへ」の各対句表現では、主体の聞得大君が祭祀を司どる神格としてより明らかに位置づけられている。

また注目されることは、3―112では聞得大君が「いけな君」||「成り子君」を「先立て」（先頭にして）、「いぐまちへ」（にぎわして）出現していることである。同じような表現は、6―333の君加那志のオモロの第三節、および12―727のオモロの第三節においても謡われている。特に6―333のオモロは、次の6―334のオモロが12―734（前出）と重複関係にあり、既に引用したように12―734は「君手摩りの百果報事」の詞書きをもつオモロである。このことからさらに、6―333、334と連続する二つのオモロが、嘉清二十八年（一五四九年）の尚清王代の二度目の「君手摩りの百果報事」という、同一の祭式の中で謡われたものであるとの見通しが成り立つのではないだろうか。6―333のオモロに謡われる「いけな君」||「成り子君」は、この連続性という観点からも、さらにまた第四節、第五節にみられる「てるかは」||「てるしの」（||日神）の謡い込みからも（「憑き降ろす」、「差す」の主体として

表現されている。君加那志を明らかに指し示していると思われる。

ここであらためて、「君手摩りの百果報事」の各オモロの類型表現に注目しながら、高級神女たちのもたらすセズがよって来たる△他界▽について考えて稿を結びたいと思う。

おわりに——オボツ・カグラの神々

ここで、詞書きを欠くが明らかに万暦三十五年（一六〇七年）の「君手摩りの百果報事」のオモロとみられている「煽りやゑ」の用例が、神女たちの出自とそこからもたらされるセズの性格をはつきりともものがたっていると思われる。

12  
— 742

一聞<sup>きこ</sup>ゑ煽<sup>あお</sup>りやへや

君<sup>きみ</sup>ぎや精<sup>すへ</sup> 降<sup>お</sup>れわちへ

按<sup>あ</sup>司<sup>ち</sup>襲<sup>お</sup>いに

おぼつ 鳴<sup>と</sup>響<sup>よ</sup>む

君<sup>きみ</sup>ぎやせち みおやせ

又<sup>と</sup>鳴<sup>よ</sup>響<sup>も</sup>む国<sup>も</sup>守りや



ませ 願<sup>ねが</sup>て 降<sup>くだ</sup>れわちへ

又<sup>また</sup>てだが末<sup>すへ</sup>按司<sup>あぢおそ</sup>襲<sup>おそ</sup>い

すへ勝<sup>まさ</sup>る王<sup>わう</sup>にせ

又<sup>また</sup>おぼつせぢ 有<sup>あ</sup>らぎやめ

君<sup>きみ</sup>ぎやせぢ 有<sup>あ</sup>らぎやめ

又<sup>また</sup>天<sup>てん</sup>ぎや下<sup>した</sup> 襲<sup>おそ</sup>て

首<sup>しより</sup>里<sup>もり</sup>杜<sup>と</sup> 相<sup>ふ</sup>応<sup>さ</sup>よわ

(―線部、引用者)

神女煽りやへがセヂ豊かな君として降臨し、おぼつに鳴り響く自身のセヂを国王に奉ることが宣言されている。君のセヂは「おぼつせぢ」であることは、第四節の対句関係からも明らかであろう。「按司襲<sup>あぢおそ</sup>いにおぼつ鳴<sup>とよ</sup>響<sup>き</sup>む 君<sup>きみ</sup>ぎやせぢ みおやせ」と謡われる反復句は右のオモロの主題を表現するものとなっている。例えば、1―39のオモロにおける「おぼつ世の 真高<sup>まだか</sup>さ」「かぐら世の 真高<sup>まだか</sup>さ」と讃えられる天上他界へオボツ・カグラ✓から「てるかは」||「てるしの」(||日神)あるいは最高位の神女聞得大君の指示を仰ぎながら自身の継承するセヂをもたらし、国王との対面を果たしつつそのセヂを奉る高級神女たちは、ただオボツ・カグラのみに由来するセヂを身に憑けつつ国王

を靈的に守護する。ニルヤ・カナヤおよびオボツ・カグラという二つの異なった他界の双方に最高神女として関わる聞得大君とはちがって、「さしふ 五ころ<sup>いつ</sup>」とも謡われ、あるいは「いけな君」<sup>な</sup>「成り子君<sup>きよ</sup>」とも表現される、いわば聞得大君の次位の神格を有する王族神女たちは、天上他界<sup>二</sup>オボツ・カグラを出自とする神女集団といえよう。さらに、「君手摩りの百果報事」のオモロに登場する、聞得大君以外の五人の神女たちは、「おぼつ君々」と謡われる神女集団の主要メンバーであったということが出来る。彼らは、やはり聞得大君を頂点とし三人の大アムシラレを次位とする、ニルヤ・カナヤを出自とする神女行政組織とは区別され、オボツ・カグラという天上他界との交流を果たす〈担い手〉達であつたと考えられる。

#### 主な参考文献

- 仲原善忠・外間守善編『校本おもろさうし』（角川書店）  
仲原善忠・外間守善編『校本おもろさうし辞典・総索引 第二版』（角川書店）  
外間守善・西郷信綱編『日本思想大系18おもろさうし』（岩波書店）  
玉城政美『南島歌謡論』（砂小屋書房）

#### 注

- （1）嘉手苅千鶴子氏「『おもろさうし』神女考―詞書きをもつおもろよりみた―」（『沖縄文化研究 14』所収）。

法政大学沖縄文化研究所 一九八八年三月五日発行。この中で巻12—732のオモロから12—745のオモロについて、詞書きのない、734、741、742のオモロも「君手摩りの百果報事」のものと想定されている。本稿でもこの見解を踏襲している。

(2) 小島瓔禮氏「首里城—王権を讃える神々」、「聞得大君御殿—琉球神道を支配する神女」(『日本の神々—神社と聖地 13 南西諸島』所収。一九八七年十一月二十日発行。白水社刊。)

(3) 玉城政美氏『南島歌謡論』(一九九一年二月一日発行。砂子屋書房刊。) 本稿とのかかわりでは、特に「第三部 南島歌謡のモチーフ」が示唆に富む。

(4) 12—694、695、733のオモロは、詞書きに「尚元王」と記されているが、校本頭注にあるようにいずれも「尚清王」の誤りである。正しい形で表記した。

(5) 12—694、695について、「己巳」↓「乙巳」と、校本頭注にならって正しい形で表記した。

(6・7) 小島氏前掲(2)論文。尚永王代の一五七八年の「君手摩りの百果報事」は、第三代聞得大君の梅岳が任職した直後に、また尚寧王代の一六〇七年の「君手摩りの百果報事」は、第四代聞得大君の月嶺の任職直後にそれぞれ挙行されていること、この二つの事実から、尚清王代の一五四五年の「君手摩りの百果報事」が第二代の聞得大君の梅南の任職直後であった可能性が指摘されている。聞得大君の新任を受けて「君手摩りの百果報事」が挙行されていることが、神女の側の理由として家譜資料等の中からはじめて明らかにされたものであり、大きな意義をもつものといえよう。

(8) 『沖縄歴史地図』および『那覇市史 資料篇—家譜資料(三)首里系』、『中山世譜』より作成。また、宮城栄昌氏『沖縄のノロの研究』および前掲(2)論文を参照した。

(9) 前掲(2)論文を参照。

(10) 前掲(2)論文では、新任の君加那志を中心としたものとの推量がなされている。

(11) 『岩波本』頭注。『混効験集』には「なりきよ又いけな」として「世界の事」、「いけなきみ」、「なりきよきみ」について「神の名なり」と記す。「成る<sup>な</sup>」については、『おもろさうし辞典・総索引』は「生まれ変わる<sup>な</sup>こと」と説明する。

(12) 玉城氏前掲(3)書の第三部中、「第一章神女が主体になるモチーフ」では、『降りる』に付随する動作・状態」として、「神女が降りるときに靈力がゆたかについている状態であることをしめす。」と解している。